

< 2018年 5月 >

古賀 順子

「カイユボット邸」

5月はフランスも祝日が多い。1日メーデー。8日第二次世界大戦の終戦記念日。今年は10日キリストの昇天祭と21日五旬節(または聖霊降臨祭)。夏が続いたかと思うと雨が降り一挙に気温が下がり、5月の天候は不安定だが、晴れ間を狙ってパリ郊外の「カイユボット邸」を見学に行った。イエール川に沿った庭や畑があり、3月中旬から11月まで開館、庭や畑は朝から入れるが、邸宅と展示会場は14時から18時30分までだ。

パリから南東25kmにイエールという町があり、車なら1時間、RER D線とバスを乗り継いで1時間30分位の距離である。イエール川に沿った領地は16世紀からお屋敷があったところで、1860年、画家ギュスターヴ・カイユボット(1848-1894)の父がその領地を購入する。軍隊にシーツ、掛け布、マットレス生地などを卸して巨額の財を築いた父親である。パリに居を構えるが、時はオスマン公爵によるパリ大都市改造の只中、市内は至るところで大規模な工事が絶えない。騒音を逃れ、のどかな休息の場として近郊に別荘を持つのがパリのお金持ちの流行だった。2度妻と死別し、最初の婚姻で生まれた息子アルフレッド・カイユボット(1834-1896)は司祭になり、貧しい人々の救済に尽くす。3度目の結婚で生まれたのが、ギュスターヴ、ルネ(1851-1876)、マルティアル(1853-1910)の3兄弟で、兄は印象派の画家、弟は音楽と写真の道を進む。4人の息子たちへの理解があった父で、イエールの領地に礼拝堂を建てたり、ギュスターヴのボザール進学を支援、イタリア旅行を支援するなど、ギュスターヴは生涯を通して生活には困らず、好きな絵画と園芸に専念することができた。

イエールで過ごした時間はギュスターヴにとって幸せな日々で、『イエール川でボートを漕ぐ人』(1877)を始め、イエール川を題材に描いた作品90点近くを

残している。1874年父が亡くなり、76年弟ルネが25歳で亡くなり、78年母も他界し、遺産相続の理由でギュスターヴとマルティアルの2人は1879年イエールの領地を売却し、パリ郊外プチ・ジェヌヴィリエの一軒家を購入する。

ギュスターヴ・カイユボットは裕福で、モネやルノワールを始めとする印象派の画家たちを金銭的に援助したメセナとして知られ、作品自体が評価されるには、死後100年が過ぎた1994年グラン・パレの回顧展を待たねばならなかった。

1878年売りに出されたカイユボット邸は、以後も何度か所有者が変わり、1973年最後の持ち主が破産し、最終的にイエール市がただ同然で買い上げた。邸宅も領地も荒れて、大規模な修復工事が必要で、長い間その後の利用計画が決まらない状態だった。改修するにしても、何度も所有者が変わった邸宅をどのように修復するか、歴史的な検討がなされ、ギュスターヴ・カイユボットに象徴される絵画芸術に捧げる領地としてのリノベーションが行われた。2017年6月工事は終了し、イエール市とカイユボット友の会の町づくりがようやく日の目を見ることになる。

今年2018年4月7日から7月29日まで「夢の扉、象徴派の眼差し」展が開催されている。個人蔵から成る象徴派の作品展で、アメリカ国籍の女流画家ロメーヌ・ブルックス(1874-1970)『春』(1911-1913頃)が展覧会のポスターになっている。1870年から1914年の間、ヨーロッパの画家と彫刻家たちが展開した芸術運動を子供たちにも分かり易く、夢や伝説などテーマ別の展示が工夫されている。

庭や畑など領地入園は無料。カイユボット邸と展覧会は、イエール市民3ユーロ、その他は10ユーロ。五月晴れの祝日のためか、館を見ながら庭でくつろぐ家族連れ、散歩を楽しむ市民が圧倒的だった。有名な観光地とは言えないが、19世紀に新古典主義の邸宅として繁栄した歴史を大切に受け継ぐことで国の文化継承を図るイエール市の試みは、日本の町興しの参考にもなるだろう。